

yāmakālika について

井 上 綾 瀬

1. はじめに

諸律文献中で薬事に相当する部分でヤーマカーリカ⁽¹⁾と呼ばれる食品が解説される。ヤーマカーリカとは、健康な比丘であっても午後から口にしてよい飲料の総称である。先行研究では、諸律文献に記されるヤーマカーリカの内容の紹介（西本 [1955]、佐藤 [1963]、平川 [1994]）がなされている。これらの中で、ヤーマカーリカは、一種の薬品と考えられており、諸律文献を合わせて全体的に把握されている。

ヤーマカーリカに関する問題として、植物などの種類の同定（Sp. などの検討）がなされていないこと、ヤーマカーリカの定義が定まっていないこと、因縁譚に関する検討が無いこと、諸律文献の特徴が明白でないことなどが考えられる。そこで、本研究では、注釈書を用いての植物の同定、諸律文献の植物の異同、因縁譚の検討を行う。

2. ヤーマカーリカの種類と同定

(1) Vin.

Vin. では、パーチッティヤ（波逸提, *pācittiya*）の解説と薬健度（薬事, *bhesajja-khandhaka*）にヤーマカーリカの記事がある。内容説明は、薬健度でされる。因縁譚と条文で規定され、比丘に午後でも飲料を飲むことが許可される。Vin. では、8種と4種の飲料が許可される⁽²⁾。許可の条文で「8種のジュース（*aṭṭhi-pāna*）」が許可されるため、ヤーマカーリカは8種であると言われることが多い。残りの4種のジュースは、補足として扱われる。厳

密には、ヤーマカーリカという言葉は、薬健度で使用されないが「8種のジュース」がそれに相当する。Vin. のみで出来る同定を以下に示した。

- ①マンゴージュース⁽³⁾ (amba-pāna)
- ②ムラサキフトモモ⁽⁴⁾ (jambu) ジュース
- ③チョーチャ (coca) のジュース
- ④モーチャ (moca) のジュース
- ⑤マドゥ⁽⁵⁾ (madhu) のジュース
- ⑥ブドウ⁽⁶⁾ (muddikā) ジュース
- ⑦サールカ⁽⁷⁾ (sāluka) のジュース
- ⑧パールサカ⁽⁸⁾ (phārusaka) ジュース
- 9' 穀物の粒 (phala) のスープ (rasa) を除いたすべての果実の汁
- 10' 野菜 (ḍāka) のスープを除いたすべての葉の汁
- 11' カンゾウ⁽⁹⁾ の花 (madhuka-puppha) のジュースを除いたすべての花の汁
- 12' サトウキビ⁽¹⁰⁾ (ucchu) ジュース

(2) Sp.

Sp. の注釈では、ヤーマカーリカの作り方や、受用方法などの注意書きがある。この Sp. の記述より同定した飲料⁽¹¹⁾がある。ヤーマカーリカに関する注釈では、前半に8種のジュースの作成法⁽¹²⁾が、後半に補足4種のスープの摂取法⁽¹³⁾が示される。先行研究において、『十誦律』では、8種のジュースは漉し水浄と火浄を行い⁽¹⁴⁾、漉さずにカスのあるものは午前中の食事になる⁽¹⁵⁾と、解釈されている。しかし、Vin. と Sp. では、このような規則は見当たらず、これは『十誦律』と『摩訶僧祇律』の特徴⁽¹⁶⁾である。

Sp. の中で、チョーチャジュースとモーチャジュースは、種のあるバナナと種のないバナナのジュースであると注釈される⁽¹⁷⁾。バナナは、有史以前より、インドネシアやタイといった東南アジアを発祥に品種改良と栽培が

行なわれ、種のほとんどのない加熱用、生食用のバナナ、大きな種を含んだ生食用バナナなどが栽培されてきた⁽¹⁸⁾。Sp. に注釈のあるように種のあるバナナと種のないバナナが古代インドに存在したことは推測できる⁽¹⁹⁾。また、MSV. にも同様の記述があり、モーチャは、バナナである。しかし、チョーチャは確定できない。

Sp. より、Vin. の同定を行なったものは、以下の通り。

③種のあるバナナのジュース

④種のないバナナのジュース

⑤ハチミツのジュース

* 数字は Vin. に準ずる

(3) 漢訳律、および、MSV.

それぞれ、Vin. の薬鍵度に相当する部分にヤーマカーリカの内容が示される。整理すると以下ようになる。漢訳律などの植物名は、Vin. の順に従い並べ変わっている。当てはまらないものも続けて欄下に示した。

	パーリ律	五分律 ⁽²⁰⁾	摩訶僧祇律 ⁽²¹⁾	四分律 ⁽²²⁾	十誦律 ⁽²³⁾	MSV. ⁽²⁴⁾	MSV-C ⁽²⁵⁾	MSV-T ⁽²⁶⁾
マンゴー	amba	菴婆果	名菴羅		周梨			
ムラサキフトモモ	jambu	閼婆果		閼浮				
種のあるバナナ	coca	俱羅果	拘梨		拘樓	coca	招者	shing thog tzo tza
種のないバナナ	moca		芭蕉果		茂梨	moca	毛者	chu shing
ハチミツ	madhu	蜜						
ブドウ	muddikā	蒲桃果	葡萄	蒲桃	蒲萄	mṛdvikā	篋栗墜	rgun 'bru
	sāluka			舍樓伽?	捨樓?			
	phārusaka	波樓果	波樓沙		頗留沙	pāliṣika	鉢魯灑	pa ru sha ka
果実	Phala 以外							
葉	ḍāka 以外							
花	madhuka 以外							

サトウキビ	ucchu	甘蔗	石蜜	甘蔗				
ナツメ						kola	孤洛迦	rgya shug
インドボ ダイジュ					説波多?	aśvattha	阿説他果	aa shvattha
フサナリ イチジク						udumbara	烏曇跋羅	au dum'a ra
サボジラ			佉披梨?			kharjūra	渴樹羅	bra go
ザクロ			安石榴					
サンザシ				酸棗				
			巖多					
				梨	梨			
		周陀果						
			樓樓籌					
			闍伽提					
			劫頗羅					
			波籠渠					
			呵梨陀					
				蕤果				
				婆樓師				
	8 + 4 種	8 種	14 種	8 種	8 種	8 種		

(4) ヤーマカーリカの定義

Vin. では、ヤーマカーリカを「菓 = bhesajja」と呼ばない。しかし、『十誦律』で「時分菓」、『摩訶僧祇律』で「夜分菓」、『五分律』で「非時菓⁽²⁷⁾」と漢訳され一種の菓品として捉えられてきた。漢訳者の手によってヤーマカーリカは「菓」と結び付けられた、或いは、漢訳者の使用テキストではヤーマカーリカが「菓」と結びついていたのだろう⁽²⁸⁾。また、漢訳律文献中でヤーマカーリカは、菓品として使用される「7日間のもの (sattāhakalika, 七日菓) や寿命の限りのもの (yāvajivika, 尽形寿菓) と共に「非時菓⁽²⁹⁾」に分類される。この場合の「非時菓」とは、午後にも健康な、或いは、病気の比丘が口にしてよいものを総称している言葉であり、漢訳律文献に散見できる。漢訳律文献では、非時菓に対して、時菓⁽³⁰⁾が存在し、これは午前中に比丘が食べる食事の総称である。比丘の食事内容や食事法は、病気の治療

法とも混在するため、複雑に規定されており、整理したものであろう。これらの背景から「比丘の食事は、薬である⁽³¹⁾」などと表現される。

しかし、Vin. では、「時薬、非時薬」という区分はなく、比丘が口にするのは「カーダニヤ、ボージャニヤ、ヤーマカーリカ、七日間のもの、寿命の限りのもの⁽³²⁾」の5組を列挙する。さらに、Vin. でも、その他の律文献でも、因縁譚で、ヤーマカーリカが「薬」であるといわれることはない。Vin. の薬健度に限って鑑みればヤーマカーリカは、薬で無く、比丘が正午以降も摂取できる飲料と考えるべきである。その他の用例については、いちいちの検討が必要であり今後の課題である。

3. 因縁譚について

(1) Vin. の因縁譚

ヤーマカーリカが規定されるまで、また、規定されてからの両方の背景が因縁譚で示される。この因縁譚によって、ヤーマカーリカが制定されるに至る。ヤーマカーリカの植物などの異同が文献ごとに存在することは先にも示したが、因縁譚のストーリーはどの文献も省略などの違いを含むが似ている。ここでは、Vin. の因縁譚を整理してみる。あらすじは、次のようである。アルファベットは、筆者の判断で適宜区切った。

- A. ブッダたちが、アーパナに到着する。
- B. ブッダが、到着したことと、よい噂をケーニヤ・ジャティラが耳にする。
- C. ケーニヤは、ブッダに何を布施するか悩む。
- D. バラモン教の昔の聖仙も、現在のバラモンも午後に食事は取らないが、ジュースは飲むことを知っていたケーニヤは、ブッダも同じだと考えて、ジュースを用意する。
- E. ケーニヤが、ジュースを持って、ブッダのところへ行き布施しようとする、比丘サンガに渡すようにブッダに言われる。

- F. 差し出されたジュースを、比丘たちは、不正を犯すことを恐れて受け取らなかった。
- G. ブッダが、比丘たちにジュースを受け取るように指示する。
- H. ケーニヤは、十分な量のジュースを比丘たちに布施する。
- I. ケーニヤが、翌日の食事にブッダたちを招待する。
- J. ブッダは、比丘の人数が多いことと、ケーニヤがバラモン教の信者であることを理由に2度までは断るも、3度目には招待を受ける。
- K. これを継起にブッダは、比丘たちが、午後も飲むことの出来るジュースについて規定する。
- L. 次の日、ケーニヤは、食事を用意し、ブッダたちに十分な量の食事を布施する。
- M. 食事を終えたブッダは、ケーニヤに偈を語ったのち去る。

登場人物は、ケーニヤ、ブッダ、比丘、比丘サンガである。ケーニヤが、昔からのバラモンを思い起こし、彼らが午後にもジュースは摂取することを考え布施を申し出る。Vin. が、規定を行なう場合には、社会一般の人々から詰られて作成される場合、他宗教の遍歴者たちの習慣や比丘サンガの意見を取り入れるため、或いは、排除するため作成される場合など、様々な方法で作成される。しかし、ヤーマカーリカの因縁譚のように、他宗教の習慣が発端となって規定がされることは、珍しい。また、この因縁譚は、近似した話が Sn. にある。

(2) Sn. の近似した話

Vin. のヤーマカーリカの因縁譚と近似した話が Sn. の大品、セーラの経にある。サンユッタニカーヤやクッダカニカーヤ、漢訳の阿含経などの文献に関しては近似した話の有無も確認できていない。これらに関しては今後の課題である。本論文では、律文献で使用するヤーマカーリカの解明を目指しており、ここでは、Sn. の近似した話の紹介を行う。従って、Vin. の因縁譚

を分類した表記によって以下のように整理した。

A. ～ B. 同じ文章

C. ～ H. 存在せず

I. ～ J. 同じ文章

J'. 招待の準備のためにケーニヤが、忙しく立ち回っているところへ、セーラバラモンが訪れ、三十二相を備えたブッダの噂を聞く。セーラは、ブッダが本当に正等覚者か確かめに出かける。そして、正等覚者なのを目の当たりにして、仲間と共に出家し具足する。

K. 存在せず

L. ～ M. 同じ文章

M'. セーラは、7日間熱心に修行し、仲間と共に阿羅漢となる。そして、ブッダのところへ近づき、偈を話す。

Vin. と Sn. を比較すると、全く同じ文章がいくつか存在する。Sn. では、Vin. に比べ、登場人物が増えている。また、セーラの経と名前が付いているように、主人公は、ケーニヤではなくセーラである。Sn. では、セーラが仲間たちと出家具足し、阿羅漢になることが重要な出来事である。

このように主人公は異なるがヤーマカーリカの因縁譚と近似したストーリーがある。それぞれが全く関係のないところで成立したとは考えにくい。しかし、Vin. の因縁譚と Sn. のセーラの経とのつながりも不明である。これらの問題解決は、今後の課題として残っている。

(3) 薬鍵度の中のヤーマカーリカの因縁譚の特徴

薬鍵度の因縁譚は、tena samayena という句で始まることが多く、atha kho という句では、場面転換や前場面との繋がりを示すことが多い。また、Sp.⁽³³⁾で言われる様に tene samayena は、経の ekam samayaṃ に相当し、いつこれから語られる出来事があったかを示す。しかし、ヤーマカーリカの因縁

譚は、多くの薬健度の因縁譚と異なり、*atha kho* の句から開始され、規定後に、偈が説かれる。偈が説かれることも薬健度の中では珍しい。ただ、これらの定型句は、口伝の影響で変化した間違いのひとつである可能性も否定できず、差異が認められるだけのものである。定型句を収集して、細かな違いの検討は、今後の課題である。

Sn. との共通や、薬健度の因縁譚としては珍しい形など、ヤーマカーリカの因縁譚には、特徴がある。現存する Vin. の形態になる前には、記事や規則の出入りがあったと考えられている。他の因縁譚と特徴を異にするということは、何か背景があったとも推測できる⁽³⁴⁾。

4. おわりに

Vin. の薬健度に限ればヤーマカーリカには、治療のための「薬」の意味は無く、比丘たちにとって広く一般に午後の摂取が認められている飲料を指している。また、諸律文献によって異なるが、受用方法に関する規則も厳しいものではない。ヤーマカーリカに規定される果物や植物の同定は、今後課題が残っている。諸律で入り乱れており一定のヤーマカーリカは存在しない。しかし、どの律文献にもヤーマカーリカの記事はそろっており、比丘の生活に欠かせない物であったであろう。因縁譚については、いくつかの不可解な点が残されている。Vin. に関しては、Sp. との関わりの問題も残されている。

律文献中の全てのヤーマカーリカを示す言葉に「薬」の意味は無いのか、また、もし、「薬」の意味が無いならばどうしてこの記事が薬健度に分類されているのかについて、今後の課題としたい。

注

- (1) Vin. に記される *yāmakālika* とは、「*yāma* (夜) の [*kālika* (時分)] *kāla* (時間) に関するもの」という意味を持っている。
- (2) *Atha kho bhagavā etasmim nīdāne dhammīkatham katvā bhikkhū āmantesi: “anujānāmi*

bhikkhave, añña panāni: ambapānaṃ jambupānaṃ cocapānaṃ mocapānaṃ madhupānaṃ muddikāpānaṃ sālukapānaṃ phārusakapānaṃ. Anujānāmi bhikkhave, sabbam phalarasaṃ ṭhapetvā dhaññaphalarasaṃ. Anujānāmi bhikkhave, sabbam pattarasaṃ ṭhapetvā dākarasaṃ. Anujānāmi bhikkhave, sabbam puppharasaṃ ṭhapetvā madhukapuppharasaṃ. Anujānāmi bhikkhave ucchurasa” nti. (Vin. I. p. 246)

- (3) Pāli. amba < *ambra < Skt. āmra.

同化の法則 (Geiger [1978] p. 94. §51. 5. m と l/v/y/r の間に b をはさむ。その後で、同化、或いは、svarabhakuti が起こる。)

学名 *Mangifera indica*, 英名 Mango tree (IMP. 3. pp. 380–390) 和名 マンゴ (植物要覧 [1996] p. 268)。

- (4) Pāli. jambu < *jambū < Skt. jambūḥ.

Mora の法則 (Geiger [1978] pp. 63–65) ḥ の消失 (水野 [1997] p. 29)。

学名 *Syzygium cumini*, 英名 Black plum (IMP. 5. pp. 225–228) 和名 ムラサキフトモモ (植物要覧 [1996] p. 348)。

- (5) madhu は、ハチミツである。しかし、食事に関する記述では、植物のカンゾウである場合も多く Vin. の記述だけでは、同定できない。

- (6) Pāli. muddikā < *muddikā < *mudvikā < *mudvikā < Skt. mṛdvikā.

同化の法則 (Geiger [1978] pp. 93–94), Mora の法則, Skt. の ṛ は、Pāli で a/i/u に変化する (Geiger [1978] p. 61)。

学名 *Vitis vinifera*, 英名 Wine grape, Common grape-vine (IMP. 5. pp. 396–403)

- (7) sāluka (–ūka) nt. [Skt. śālūka] the edible root of the water-lily. (PED. p. 707)

同定に至らず。

- (8) phārusaka [Skt. *pāruṣaka] a certain flower, the (bitter) fruit of which is used for making a drink. (PED. p. 478)

MSV. のヤーマカーリカに近似した名称 (Skt. pārṣika) あり (MSV. p. ii, l. 18)。

同定に至らず。

- (9) Pāli. madhuka < *Skt. madhukaḥ ḥ の消失。

学名 *Glycyrrhiza glabra*, 英名 Licorice (IMP. 3. pp. 84–88)

- (10) Pāli. ucchu < *icchu < *Skt. ikṣu.

隣接する母音の影響 (Geiger [1978] pp. 69–70) kṣ → cch に変化 (Geiger [1978] pp. 99–100)。

学名 *Saccharum officinarum*, 英名 sugar cane (IMP. 5. pp. 30–43) 和名 サトウキビ (植物要覧 [1996] p. 509)。

- (11) ハチミツのジュースは、Vin. の段階では、植物の一種だと考えていたが、薄めないと摂取できないことから、蜂蜜でも問題ないと考えこの同定に至った。蜂蜜は、

「七日間のもの」にも含まれる。

- (12) Sp. 5. pp. 1101–1102.
- (13) Sp. 5. pp. 1102–1103.
- (14) 西本 [1955] p. 238. 水淨→水を一滴混ぜて好味を壊す。火淨→火を加えることで、体内で種子を壊すことを免れる。
- (15) 佐藤 [1963] pp. 629–630.
- (16) 以水作淨應飲。(T23, p. 193a28–29) 若持漿來者應作淨。若器底有殘水即名作淨。若天雨墮中即名作淨。若洗器有殘水亦名為淨。若車載石蜜被雨者即名為淨。若船載水湍即名作淨。若淨人洗手水湍亦名為淨。是名漿法。澄清一切聽飲。若變酒色酒味酒香。一切不聽飲。『摩訶僧祇律』(T22, p. 464b5–b14)
- (17) CPD. には、「モーチャは、チョーチャの間違いではないか」という指摘 (CPD. vol. 1. part 2. p. 69) があるが、発表者は、間違いでないと考える。なぜなら、Vin. にこの記述が存在するだけでなく、MSV. やアーユルヴェーダのように仏教以外でも使用される。
- (18) 中尾 [1966] pp. 22–27 参照。
- (19) Sp. の注釈が Vin. の時代を反映していないこともありえる。そのため、パーリより、サンスクリットの植物名を想定し、アーユルヴェーダの植物を調査してみると、チョーチャ (Pāli. coca=Skt. coca 学名 *Polyalthia longifolia*, 英名 Masttree, Cemetery-tree (IMP. 4. pp. 330–332) 和名ナガバキタチオウソウカ (植物要覧 [1996] p. 70)) は、和名ナガバキタチオウソウカ、モーチャ (Pāli. moca < *Skt. mocā 学名 *Bombax malabaricum*, 英名 Red silk cotton tree (IMP. 1. pp. 288–292) 和名パンヤ (植物要覧 [1996] p. 298)) は、和名パンヤという植物が浮上する。どちらも食用にされる植物である。この同定方法にも問題 (サンスクリットの想定が正しいか不明。現在まとまっているアーユルヴェーダの知識は Vin. より、新しい。アーユルヴェーダが古代のものか不明。など多数。) があり、確実だといえない。
- (20) 所謂菴婆果漿閼婆果漿周陀果漿波樓果漿蒲桃果漿俱羅果漿甘蔗漿蜜漿。(T22, p. 151)
- (21) 一名菴羅漿。二拘梨漿。三安石榴漿。四巔多漿。五葡萄漿。六波樓沙漿。七樓樓籌漿。八芭蕉果漿。九闍伽提漿。十劫頗羅漿。十一波籠渠漿。十二石蜜漿。十三呵梨陀漿。十四佉披梨漿。(T22, p. 464)
- (22) 梨漿閼浮漿酸棗漿甘蔗漿蕤果漿舍樓伽漿婆樓師漿蒲桃漿。(T22, p. 873)
- (23) 一周梨漿。二茂梨漿三拘樓漿。四捨樓漿。五說波多漿。六頗留沙漿。七梨漿。八蒲萄漿。(T23, p. 193)
- (24) cocapānam mocapānam kolapānamaśatthapānamudumbarapānam pāliṣikapānam mṛdvikāpānam kharjūrapānam ca.

- (25) 一招者漿（西方樹名。亦名顛咀梨。角同皂莢。其味如梅。角寬一兩指。長三四寸。時人鎮食）二毛者漿（即芭蕉子。以少胡椒糝。安在果上。手極撻之。皆變成水）三孤洛迦漿（狀如酸棗。其味一種。唯有此棗。無甜者）四阿說他果。五烏曇跋羅（其果大如李）六鉢魯灑（其果狀如蓼蓂子。味亦相似）七篋栗墜漿（即是葡萄果）八渴樹羅漿（形如小棗。甜而且澀。樹多獨立。形若棕櫚。此等諸漿。皆須淨洗手。淨瀘漉。然後堪飲）。一中略一椰子芭蕉及酸棗 阿說他果烏跋羅 蓼蓂蒲萄渴樹羅 是謂八種漿應識 (T24, p. 1)
- (26) shing thog tzo tza'i tung ba dang/ chu shing gi 'bras bu'i btung ba dang/ rgya shug gi btung ba dang/ aa shvattha'i btung ba dang / au dum'a ra'i btung pa dang/ pa ru sha ka'i btung ba dang/ rgun 'bru'i btung ba dang/ 'bra go'i btung ba'o / (北京: Khe 260b 6-7)
- (27) T22, p. 47c23 など。
- (28) しかし、『四分律』や「根本説一切有部律」でヤーマカーリカは、「非時漿」と訳され「藥」という文字は Vin. と同様に使用されない。T23, p. 666a24 など。
- (29) ここでいう「非時藥」は、『五分律』で「非時藥」と訳されるヤーマカーリカとは異なる。
- (30) Vin. でいう khādaniya と bhojaniya をまとめたもの。
- (31) 佐藤 [1972] p. 628.
- (32) このうちで「七日間のもの、寿命の限りのもの」は、処方からみて「藥」であることは、間違いないと思われるが「*sattāhakalika-bhesajja, 或いは, *yāvajīvika-bhesajja」と「藥」という単語と結びついた表現はない。
- (33) Sp. 1. 106. 4-25.
- (34) 他にもこの記事に関する特徴がある。ヤーマカーリカの因縁譚の注釈の特徴として、次のことが挙げられる。通常、Sp. の注釈は、一度註釈したことは、その後、注釈しない。そのため、前半の注釈の方が後半の注釈より膨大な量にのぼる。この原則に則ると藥鍵度は、後半に註釈されるので、定型句が註釈されることはない。しかし、ヤーマカーリカの因縁譚では、規定に関係する定型句が注釈される。しかも、Vin. の文句と Sp. の文句は、一致しない。

ātha kho bhagavā etasmim̐ nidāne dhammikathaṃ katvā bhikkhū āmantesi. (Vin.)

さて、世尊はこの因縁に基づいて法話をなされて比丘たちに呼びかけられた。

etasmim̐ nidane etasmim̐ pakaraṇe dhammim̐ kathaṃ katvā'ti, (Sp.)

この因縁に基づいてこの契機に法話をなされて、とは、

Vin. のこの定型句に続き、規定の条文が anujānāmi Bhikkhave 云々と始まる。これは、藥鍵度に見られる特徴ではなく、經分別や他の鍵度でも同様に使用される。

多用される表現にも関わらずこの部分でも註釈されるということ、及び、Vin. と Sp. の表現に隔たりがあるということは、現存する Sp. が現存する Vin. に沿っていない可能性を示す。一部分だけで判断することは難しいため、他の部分の詳細な検討も必要である。

資料, 参考文献, 及び, 略号

テキスト

Gilgit Manuscripts, vol. III, pt.I, edited by N. Dutt, Kashmir, 1960 (MSV.)

Paramatthajotikā II, vol. II, The Pāli Text Society, Oxford, 1989 (Pj.)

Samantapāsādikā V, The Pāli Text Society, Oxford, 1966 (Sp.)

Suttanipāta, The Pāli Text Society, Oxford, 1990 (Sn.)

Vinaya piṭakam I, The Pāli Text Society, Oxford, 1964 (Vin.)

辞書, 文法書

A Dictionary of Pāli, Part 1, CONE, M., PTS, Oxford, 2001 (DP.)

Critical Pāli Dictionary, Vol. 1, part 2, U.TRENCKNER, Copenhagen, 1929 (CPD.)

Dictionary of pali proper Names, vol. 1, MALALASEKERA, Reprint, 2002 (DPPN.)

Indian Medicinal Plants, vol. 1-5, ANDERSON, D., ARYA VAIDYA SALA, Orient Longman, (First print, 1994), Chennai, 2005 (IMP.)

Pāli-English Dictionary, (First print, 1921), DAVIDS, R., STEDE, W., Reprint, New Delhi, 1994 (PED.)

Pāli Literature and Language, GEIGER, W., translated by BATAKRISHNA GHOSH, 1978 (Geiger [1978])

水野弘元『パーリ語文法』1997, 山喜房佛書林 (水野 [1997])

水野弘元『パーリ辞典』2005, 春秋社

その他

上田天瑞『国訳一切経』律部 6, 1974 (国訳 [律部 6])

三枝充恵『ブッダとサンガー〈初期仏教〉の原像—』1999, 法蔵館 (三枝 [1999])

境野黄洋『国訳一切経』律部 3, 1973 (国訳 [律部 3])

佐藤密雄『原始仏教教団の研究』1963, 山喜房佛書林 (佐藤 [1963])

富増健太郎「「畜七日薬過限戒」の研究」『パーリ学仏教文化学』20, 2006, pp. 65-74. (富増 [2006])

中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』1966, 岩波書店 (中尾 [1966])

- 中村知見「チベット・中国仏教の薬品」『駒沢大学大学院仏教学研究学会年報』31, 1998, pp. 39-55. (中村 [1998])
- 中村知見「初期仏教教団の薬品 Mahāvagga VI bhesajjakkhanda と Mūiasarvāstivāda vinayanastu bhaiṣajyavastu の薬品リストを中心に」『駒沢大学大学院仏教学研究学会年報』30, 1997, pp. 69-79. (中村 [1997])
- 中村元『ブッダのことば』1994, 岩波文庫 (中村 [1994])
- 並川孝儀『ゴータマ・ブッダ考』2005, 大蔵出版
- 西本龍山『四分律比丘戒本講讃』1955, 西村為法館 (西本 [1955])
- 西本龍山『国訳一切経』律部10, 1975 (国訳 [律部10])
- 西本龍山『国訳一切経』律部14, 1975 (国訳 [律部14])
- 西本龍山『国訳一切経』律部23, 1975 (国訳 [律部23])
- 熱帯植物研究会『熱帯植物要覧』第4版, 1996 (初版, 1984), 養賢堂 (植物要覧 [1996])
- 平川彰『二百五十戒の研究』3, 平川彰著作集15巻, 1994, 春秋社 (平川 [1994])
- 前田恵學『原始佛教聖典の成立史研究』前田恵學集別巻一, 2007 (初版1964), (前田 [2007])
- 宮坂宥勝『ブッダの教え——スッタニパータ』2002, 法蔵館
- 村上真完, 及川真介『仏のことば註—パラマッタジョーティカー—』3, 1988, 春秋社